
黄昏のオオカミ—The Twilight of Xenoatla—

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏のオオカミ―The Twilight of Xenota
tla―

【Nコード】

N4601BA

【作者名】

pand i 剛種

【あらすじ】

あらすじ：この世界は終わりを迎えようとしていた。『異人』化と呼ばれる現象は約九十億人いた人口を約一億人にまで減らし十年だった今でも神は『人』を人間と異人に選別した。俺は獣人、異人のなれの果て、或いは成りそこない、人の意思を持ち獣の体を持ち、仲間と共に『人』に争いを挑む者。

めに戦うの？」

「ねえユウ。君は何のた

わからない。この戦いの果てに何があるかはわからない。ただ、別に戦いに勝利するつもりはない、差別をなくしたいわけじゃない。あの日起きた夕暮れの地獄を終わらせるため、仲間をこの地獄から救うため、俺はこの道を歩いていく。この作品は最終話投稿時点から七日目に削除します

一話目

戦い続けて既に十年が過ぎた。

いつ終わるともわからない小競り合いの連続。

仲間は疲弊の色こそ見せないものの、刻苦は時の流れと共に確実に空気に滑り込み、体をむしばんでいた。

時が過ぎれすぎるほどに、仲間は減っていく。

少しずつ死んでいく。

狙撃されるもの。

流れ弾に当たるもの。

失血死。

服毒死。

そして、自殺――

仲間は少しずつ減っていった。

ソレと共に、道も遠のいていった。

誰かがやらなければならなかった。

道を開く者が必要だった。

この道を、たった一人で歩く人間が必要だった。

――行こう。

この道の先に未来があると言うのなら、この先に行き戦いを終わらせることができるのなら。

一步を踏み出せば、砂塵が舞い上がり夕焼けを霞ませる。

空はどんよりとしてやがて街が黄昏に沈む時に差しかかる。

そこは東京。

かつて俺達が平和に過ごした街、地下には迷路の如き線路と通路

が走り、地上には巨大なビルがいつくも立ち並ぶ。

今は、それらが全てカモフラージュ。

都庁ビルを中心に建物は巨大な遮蔽物になり、地下道は俺達の基地への道を繋ぎ、敵を遮る。

そこは東京。

巨大な戦場となった、廃墟。今は亡き世界の中心。

そして、俺達の故郷。

——行こう。

黄昏の夕闇に、広大な戦場が沈んでいく。

もうすぐあちこちでサーチライトが照らされて、街は夜の戦いへと色を変えていくだろう。

夕闇を縫い、俺達は再び地面を蹴り上げる。

銃は片手に、防弾スーツを身につけ、通信デバイスを口元に添え、灰の空気を吸い込み、巨大な棺桶に身を包む。

六メートル強のパワードスーツ、徹甲弾を装備したガトリングを担ぎ、脚部には対地中用パルスバスターを装備。肩には予備弾薬を担ぎ、モニターの向こうに宵に濡れた戦場を捉える。

皆、一斉に操作レバーを握りしめる——

東京が夜に沈んでいく。

暗闇に染まった夜闇を無数のスポットライトが照らし、至る所で暗闇がかき消される。

不意に、夜風に硝煙が混ざり、突き出た鼻につく。

程なく遠くで対装甲ライフルの射撃音が尖った耳に響き、小さく息を吸い込み、脚のレバーを踏みこむ。

『——先発隊が敵とぶつかりました』

強化パワードスーツが動き、それだけで地面が揺れる。

戦いの始まりだ。

明日に繋がるかもしれない、それともこれで終わりかもしれない。
第二次強襲作戦。

朝が始まるまでに、決着を付けよう——

「ガングレド、皆の命を預ける」

『はい、隊長』

「行こう——送電施設を今日こそ落とす」

夜の闇の中、俺達は駆ける。

これで終わることを信じ、明日へ命を繋げられることを信じ、地面を踏みこみ、強く歩いていく。

そして、目指すは東京都庁。

巨大なビルの中へ——

黄昏のオオカミ — The Twilight of Xen

O a t l a —

二話目

十年前、この世界の片隅で異常な出来事が起きた。

ある日。突然、何の前触れも前兆も、科学的予見も起こる余地もなく。

人が、水風船のように膨らみ、そして弾けた。

街の真ん中で鮮血が人々に振りかかり、やがて騒動が東京の街の片隅で起きた。

ただそれは、一時的な猟奇的な殺人事件だと思われた。

だけど、半年後、同じことが起きた。

一つだけじゃない。

渋谷。

人が行きかう、街の真ん中で三十の人間が場所を違えて一斉に破裂すると言った事が起きた。

同じく騒動になった。

ただこれはここで終わらなかった。

その後、別の人間が、人の姿をやめ、異形の化け物へと姿を変えた。

それが、最初の『異人』だった。

写真で見たただだが、壮絶なものだ——もげた首の断面から無数の触手がイソギンチャクのように伸び、肩からは動物の頭が迫り出していた。股の間からは大量の毛がワサワサと生えて、イカのようなだった。

背中には翼が生え、胸からは同じ動物の顔が出ていた。

まさに——化け物だった。

その人間はすぐさまに捕らえられ、解剖され——程なくして、

解剖をする余裕がなくなった。

当然だ、全世界で同じようなことが起きたのだから。

街中で同じように、化け物へと変化する人間が増えてきて、普通の人間を殺していく事が起きた。

街が血の海に沈んだ。

そんな事が、世界中で起きた。

子ども、老人、男女関係なく、無差別に、平等に全ての人間がそうなる可能性を、神は与えた。

そんな状況を誰も取り締まらなかった。

政府という器には、既に化け物どもが跋扈していたから。

ありえなかった。

そんなあり得ない事が科学的に何の前兆もなく起きるわけがない。だけど、何一つ手掛かりが見つかることなく、その変異現象は世界でワクチンの無いインフルエンザの様に増えていった。

結果、九十億人いた人類のうち、八十億人が『化け物』に、そして残りが人間とに振り分けられた

2056年、二月十四日。

夕日の眩しい、午後四時二十分。

神が与えたもう選別の時——その日、人は生きるべき命と、死すべき命に選別された。

皆、死んでいった。

残ったのは、普通の肌をした『人間』と獣のような頭と毛むくじやらの肌をした、理性の残った『獣人』の二種類。

今は、その十億人のうち、残った二種類の人間が、互いに戦い、或いは狩りをしているだけだった。

獣と人が戦い、或いは異人と戦う日々。

文明はすでに退廃し、残ったのはいくつもの兵器と人だけ。

そして——異人と魔法。

荒廃した世界が、この青空の下に広がっていた。

この世界は、もうすぐ終わろうとしていた。

だけどあの日の夕焼けは、
未だに続いていた

三話目

2066年、十二月二日。

東京都心。

メグロ区画。

崩れ落ちた廃ビルがいくつも並び、かつて人が住んでいたであろう廃屋がひしめく居住区画。

人の気配はなく、街の明かり一つない夜の暗闇が周囲に広がる。瓦礫が縦横に走る道に無数に走り、横倒しに崩れたビルが大きく高速道路を横倒しに倒していた。

路地裏には野良猫など動物は消え、いるのは無数の触手の生えた肉塊の骸。

『異人』の死体が暗闇の中、至る所に転がり、或いはビルの窓からダラリとだらしなく上体を垂らしていた。

五つの首を持ち、二つに裂けた胴をもった化け物。

七つの目があり、口腔の中に無数の顔を迫り出す、異形の生物が暗闇広がるメグロの街に転がっていた。

そんな死体をつつく鳥、蠅一匹すら現れず、腐ることすらなく暗闇に肉の塊が佇む。

ただ、四十万が夜闇に広がる――

――ドオオオンッ

ビルの合間から空へと立ち上る黒い土煙。

ズルリ……

衝撃に『異人』の死体が不意にビルの窓から零れおちる。

ビルとビルの間から迸る閃光。

闇を塗りつぶす光は絶え間なくフラッシュし、暗闇の中にドラムのような重たく激しい破裂音が走る。

ビルに反響する銃撃音——白い硝煙がビルの合間から昇る。
ズウウウンツ

地面に重たく響く衝撃音。

粉塵を大量に撒き散らし、崩れかけた廃ビルが中から折れて崩れる中、暗闇に飛び上がる大きな影があった。

六メートル超の巨体。

スラリとした四肢。

装甲は闇に溶け込むように、黒を基調にし、頭部は対照的に白光を放つアイサイトが二つ、そして補助サイトアイが胸に一つ。

脚部には補助ロケットスラスターが装甲の内側から展開。

噴射口の光は脚部から零れるままに、無骨で滑らかな黒の装甲を照らす。

四機の両腕にそれぞれ、狙撃銃が計二丁、突撃小銃一丁、大型ガトリングキャノンを装備し、背部の弾薬パックを装備。

閃光を放つビルの合間から飛び退くままに、近くのビルに飛び退くままに、硝煙の幕の向こうに四機の巨人が装備を構える。

『……今だ、撃て！』

——重たい発射音。

地面にアンカーを突き刺し固定した脚部がトリガーを引くままに、大きく後ずさりコンクリートが決れる。

マズルブレーキから煙が立ち上り、閃光と共に対強化装甲用徹甲弾が二発同時に飛び出し硝煙の幕を晴らす。

そして眼下から噴き上がる閃光と弾丸の雨をかくぐり、敵の影を捉える——

——ドオオオンツ

重たい衝撃音と共に、同じような大きさの機体の胸元を貫いては、僅かに浮いた上体が下半身から千切れた。

空中をクルクルと回転して夜天に向かって弧を描く上体。

ソレと共にビルの上から降り注ぐように、対装甲ガトリングランチャーの雨がビルの間にいた七機の弾幕を押し返す。

大きく上下する八連バレル。

ガトリングガンを担いで弾幕を張り続け、残った二機は後ずさる敵機を捉えて正確に胸元を撃ち抜く。

暗闇を裂く断続的な閃光の中、敵の数が五機、四機と減っていく

「アトリア！そろそろ引くぞ！」

「後十秒！」

「増援を引つ張って隊長の下に帰る気か！？」

——遠くから噴き上がる新たな光の雨。

刹那、ガトリングを背負っていた一機の頭部を掠める新たな弾幕に、四機は暗闇の中アイサイトを細めた。

そこには新たに五機、六メートル超の巨人が暗闇の中、無数の廃ビルの間を縫い煙を引いてやってきた。

——日本連邦政府所属アーマードエグザス・エルザ。

大型ロボットとして八年前、アトモス社との共同開発により旧日本政府により作られた第二期エグザスを戦闘用に改良、人が乗れるように生産された機械。

分類は大型パワードスーツで操縦者の動きに忠実に追随する事で柔軟な動きと分厚い装甲による防御力を可能とし、小型核反応エンジンによる動力によりより重たいものが持てる代物だ。

エルザはそのエグザスの強化型であり、この日本を統治する連邦政府が所有する最新鋭現行機。

そんな最新鋭機が、目の前まで来ている——

「——渋いな……逃げるに逃げれん」

「狙い撃つ……！」

「敵の方が多い時はどうすると教えられた……！」

「……遮蔽物を利用する」

「あまり戦線は下げられんが——撒くぞ」

脚部固定用アンカーが外れ、装備した武装の重さに僅かに前のめりに浮く巨体。

夜闇の中、噴き上がる弾幕を背に、四機の巨人はソレゾれ足元のビルを離れ、再び細く入り組んだビルの合間へと飛び降りた。

バキリツと罅を走らせ割れるアスファルト。

巨体は僅かに地面に沈めば、脚部装甲から補助ブースターを迫り出し、足部裏面からキャタピラが迫り出した。

土煙を上げ、地面に沿って走行を始める四機。

その後ろから直ぐさま、アサルトライフルの強化弾が雨のように降り注ぎ、ジグザグに走る四機の装甲を掠める。

『グウウ……！』

『エトナ！弾薬バックパックを切り離せ！』

『これだけで何人敵が殺せると思ってるのよ！うち貧乏なのよ！』

『お前が死んでどうなるものかよ！』

『うっさい走れ！』

ドオンッ

逃走をしながら、周囲の狭いビルの壁に装甲を擦られ、ガトリングを持った一機が大勢を崩す。

膝を僅かに折り、脚部が地面を擦り走行スピードが落ち、巨体が地面に手をつく。

そして回転して滑りながら周囲の壁にぶつかり、黒い巨人が尻もちをつきながら、動きを止める。

損傷した頭部のアイサイトを動かしながら、閃光を上げ弾丸を巻きながら近づいてくるエルザが見える。

グツとガトリングの砲台を持ち上げては敵を狙う。

トリガーを引き絞る――

『撃ち方やめ――』

――聞こえてくる低い声。

ヒュオオオオッ

闇を切る鋭い音。

瞬間、尻もちをついた黒い巨人の頭上、夜の空をよぎり、巨大な影が後方から飛び出してきた。

噴き上がる背部と脚部の補助推進スラスタ―。

スポットライトに照らされる黒い装甲。

滑らかな躯体は、柔軟な動きを空中に見せながらビルの間から飛び上がり、眼下に五機のエルザを捉える。

腕の装甲から迫り出す長いナイフ。

スラスタ―を切り自由落下するままに、左腕内蔵ブレードが一機のエルザへと向けられる。

真っ赤にぎらつく二つのアイサイトが見下ろすままに暗闇にぎらつく――

――ビルの間から立ち上る土煙。

路地内をくまなく広がる土煙の中、エルザの胸部装甲に縦に走り、火花を散らしながら機体が仰け反る。

そして暗闇と砂塵に視界が遮られ、関節が空回りながら、後ずさる――

『――引いてもらおうか』

ヒュンッ

夜風を切る鋭い音。

砂塵を払い、周囲の建物の壁に真一文字に斬痕を浮かべ、暗闇から又ウと姿を現す、長い銀髪。

追随するように噴き上がる衝撃波に晴れる土煙。

衝撃波に吹き飛ぶビルを横目に、前のめりに身体を屈め、斬痕に沿って崩れ落ちるエルザの前に黒い装甲の巨人が立っていた。

真っ赤な目が、黒い血飛沫を上げながら崩れる敵機の下半身の向こうに、四機の気配を捉える。

カシャリと小さな音を立てて走行の中に内蔵ブレードが収まる――
『エトナ。少し下がれ――ガングレド、戦線を構築するぞ』

ドスンッとアスファルトにめり込む脚部。

ソレと共に脚部の滑らかな黒い装甲が内側から開いていき、中から迫り出す巨大な杭が地面に突き刺さった。

キィイイインッ

微振動を上げて甲高い音を震わせる八つのステーキ。

四機のエルザが眼前で携行武器を構え、黒き巨人はグッと前のめりに身体を屈める。

紅い眼光を闇に浮かべる――

『広域パルスバスター始動』

――半径二キロの高周波攻撃。

『行くぞ、ガングレド』

立ち上る膨大な土煙。

甲高い空気の悲鳴と共に旧居住区画一体を覆う程に、地面が激しく割れ、砂塵が地面奥深くから噴き上がった。

音を立てて崩れ落ちる一体の無数の建物。

地面がクレーター状に窪んでいき、七機のエルザがよろめきながら、崩れた地面の中へと引きずられていく。

メグロ一体を覆うスポットライトを遮る程に夜空へと粉塵が立ち上る――

『撃て！』

――粉塵を晴らす程の激しい銃撃。

混乱する七機のエルザを捉え、暗闇を裂く閃光と共に、激しい弾幕が津波のごとく押し寄せてきた。

対装甲ライフル弾の群れが一直線に走り、夜の闇をよぎり、遙か後方から放物線描いて溜弾が土煙に吸い込まれる。

爆風がさらなる粉塵を形作り、後ずさる七機のエルザの四肢が降り注ぐ弾丸にバラバラになっていく。

ドスンッ

降り注ぐ溜弾が一機の胸部コックピットに直撃。

より激しい爆炎が浅いクレーター状の更地に噴き上がる中、紅い瞳をした黒き巨人は火柱に戦線を後退する。

肩には友軍機。ガトリングを引きずり、よろよろ歩く仲間を紅い瞳に捉える。

『エトナ……無茶をする』

『隊長……すいません』

『銃は人を殺すためにあるんじゃない』

『銃は、相手の動きを封じるために使う——生きているにせよ、死んでいるにせよ、相手に撃つことに意味がある……』

『危なくなったら直ぐに武器を捨てる。……よく生きた、エトナ』

『隊長……』

『——ガングレド、エトナ機を回収、そっちに戻る』

やがて浅いクレーター状の戦場を離れ、二機のパワードスーツは再びビルとビルの合間の暗闇に戻る。

そこには先ほどの静寂はなく、いくつもの人影が動きまわっていた。

ビルの隙間、或いは廃ビルの屋上に立ちライフル、ヘビーマシンガンを取りまわす同型機が約二十機。

仲間が膨大な弾幕を作っていく中、その後方には巨大なトラックが何台も止まり、暗闇に動きまわっていた。

それは黒い巨人を収める程に大きなコンテナを牽引していて、紅い瞳の巨人はコンテナへと友軍機を引っ張っていく。

『——ユウ隊長。更に増援が十機』

『作戦は変わらん、戦線を上げる——流れ弾に当たるなよガングレド。皆にも伝える』

『了解』

ガシャンと重たい音立てて肩装甲に壁の固定用ハンガー。

巨大なコンテナに収納され、黒い巨人はその場で蹲るままに、力なく項垂れ、紅い瞳の巨人は同じく片膝をつき項垂れる。

シューウウウ……

装甲隙間から噴き上がる圧縮空気の解放により、舞い上がる長い銀色の髪。

そして首元の装甲が内側から開き、首の後ろから顔を出す人影が一つ。

「エトナ、大丈夫か」

コンテナ内のライトに照らされる銀色の体毛。

鋭く細める紅い双眸。

鼻腔は獣の如く突き出し、牙を大きな口の端に覗かせながら、そこには狼の頭を持った男が巨人の肩に立っていた。

口元には通信用マイク。

天井を指す尖った耳がヒクヒクと動き、熱っばいたため息が白んで口の端から零れる。

銀色の尻尾は黒いスーツから飛び出し風に舞い、巨軀が飛び降りるままに、目の前の友軍機へと足を運ぶ。

長い足の爪が歩きながらコツコツと床を叩き、ユウと呼ばれた狼男は同じく首の折れた巨人の下へと歩いていく。

「エトナ、返事をしろ」

「待って……ください。ちょっと、ハッチが歪んで——」

バキリッ

首元の装甲が剥がれ落ち、飛び出す人影が一つ。

そこには同じく顔が少し茶色い体毛に覆われ、尖った耳が黒髪から飛び出す『人間』がパワードスーツから飛び降りてきていた。

ドロドロになった白い肌。

キョトンとなる同じ紅い瞳。

『獣人』と呼ばれる人間は、互いに見渡し、ニイと笑みを浮かべるままに、グニヤリと指で互いをつついた。

「よく生きた……」

「えへへっ——隊長超格好いっすよ」

「ありがとう、アリシアの報告だと、送電施設がこの向こうにあると聞いたが」

「はい、隊長の行ってた通り——奴ら、ここから都庁まで電気を送っているようです」

「敵の数はどうだ？」

「一杯」

「数えてくれ……」

「えっと——百ちよいのエルザが配備されてしまったね。自走砲もいくつか配備されていました。」

ただ送電施設自体に防衛機能はないように思えます」

そう言ってパイロットスーツの胸元から小型のPDAを取り出しつつ、年端もいかない少女はそう告げる。

銀の狼男は表情は強張ったまま小さく頷くと、肩越しに彼女、エトナのPDAを覗く。

「隊長、携帯の覗きこみはマナー違反です」

「固い事言っなよ——施設自体にシールドエフェクトは？」

「アリシアがスナイパーでつついたけどなにもありませんでしたよ？」

「……。そろそろ来るわけだ」

ペタンとげんなり気味に垂れる尖った耳。

肩を落とし苦い表情を浮かべる狼男横目に、少女、エトナは気まぐすそうに笑みを滲ませながら首をすばめた。

「どのみち皆相手するわけだしいいかなって……」

「お前が死んだら俺は悲しい……今後は危険の無い方法で探るよう」

「——はいっ」

「少し休んでろ——ガングレドッ」

照れくさそうに身体をよじるエトナを横目に、狼男は耳元に取り付けた通信用バイザーに手を掛けた。

そして尖った耳の向こうに、弾丸の発破音に混じって男の声が聞こえる。

『隊長。増援が更に十機——更にフィールド外からこちらに十機。上空から攻撃ヘリが見えます』

後エルザ輸送機がスポットライトの向こうに見えます」

「頃合いだな——フィールドを迂回して送電施設を破壊する。そちのチームには俺が入ろう」

『了解。我々は引き続き攻撃を続けます』

「戦線だけは崩すなよ。お前達だけが頼りだ」

『期待に込えて見せます、通信終了』

ブツリと音が途切れる。

狼男は強張った表情のまま小さく頷くと、やがてバイザーの周波数を変え、今度は別の人間に通信を掛けた。

「ゴルドチーム——ミハイル、ベス、ピーター、ハルキ。聞いているか」

『はいはい。聞いてます隊長っ』

『時間ですか？』

『やっぱり撃ちつぱなしは楽しいけど少しダれるぜ……』

口々に話す仲間の言葉に、苦い表情を浮かべながら、狼男はため息を漏らしつつ、彼らに命令を届ける。

「よし揃ってるな、ゴルドチームは今から部隊を離れフィールドを迂回して送電施設を破壊してもらう」

『了解。すぐ切り上げます』

「こっちには俺も入る——」

と、通信にノイズが入り、聞こえてくるのは甲高い少女の、嬉しそうな緊迫したような興奮した声だった。

『ユウツ、ダメだよっ』

「——ミアか……」

ペタンと頭に張り付く尖った両耳。

少しうんざりしたような表情を通信機越しに見せながら、ため息を噛みしめ、銀の狼はマイクに息を吐きかけた。

「で、どうした……」

『同じように迂回してこっちに近づいている連中がいる。こっちのソナーに今一瞬だけ映ったよ』

「……ガングレドッ」

通信の周波数を合わせて、先ほどの男に話しかける——

『攻撃が続けていますが、フィールド内で他に敵の姿は見えません。サーモも使っていますが』

「ありがとう。前進しろ。各機散開して敵の迎撃にあたれ。少しでも前線を上にあげていけ。ただし」

『無茶はするな——了解ッ』

発砲音交じりの通信が途切れる。

「……地下の鉄道か」

『ステルスエフェクトを使用しているね。もたもたしているとこっちが挟撃に合うよ』

「ああ……」

狼男は表情は強張らせたまま、踵を返すと眼前にそびえる五メートル強の黒い鎧の巨人を見上げた。

——東京獣人反乱軍所属機体、オルフェト。

エグザスを作り上げたアトモス・ホークライン社が独自に作り上げた強化骨格の規格であつた。

エグザスとは違い、小型核反応エンジンは使用せず、特殊なエネルギーを使用した機体で、出力は低めなもの、その動きはより柔軟により人間らしい動きを可能にした、まさにスーツであつた。

獣人の特質、その敏感な知覚にリンクさせ、索敵範囲を上昇させる能力があり、更に獣人の強靱な肉体を機体に反映させるために、搭乗者の能力によって機体の出力、及び装甲強度が大きく向上する機体だつた。

エルザと違い、出力、性能と共に搭乗者の如何によってすべて決まる、そんな特殊な機体が配備されていた。その中心にはその特殊なエンジンが関係していた。

銀の狼男、ユウ・ハヤテが乗る機体は、その機体弾力性を更に特化させた機体であり、機体の能力よりもパイロットの身体能力が優先される機体だつた。ただその装備はほぼすべて内蔵であり、内蔵機関砲、対装甲用ブレード、広範囲ステルス機能と特殊音波発生装置以外は装備されていない。

高機動を追求するために装備を内蔵した機体——そんなスラツとした躯体の巨人を前にユウは銀色の体毛を逆立てる。

興奮に僅かに鼻息を荒くしながら、スウと目を細め巨人の装甲に手を触れる――

「――行こうか、相棒」

『ユウ、どうするの?』

「……ミア。ソナーで確認できた場所は?」

『ここから北東に一キロ先』

「ゴールドチームに連絡しておいてくれ……アルファチーム。アリシア、ミナト、ユン――エトナは無しで」

後ろで愕然とした表情を浮かべる小さな女の子を横目に、狼男は通信バイザーを手に当て地面を蹴りあげた。

『隊長?うちのエトナがまたなんかやらかしました?』

「嫁を戦場に出すお前によりましたよミナト……別動隊がこっちに來ている、迎え撃つぞ」

『――人出が少ないんですよ……こちらは』

「自分の手で守るように努力しても罰はあたらんよ――ポイントをこっちで指定する、二分後に來い」

『了解ッ』

『あ、隊長。私の評価は――』

「アリシア、後で説教だな」

『――すみません……』

通信が途切れ、銀の狼男はパワードスーツ、オルフェトの肩に飛び乗ると首の後ろに跳び移った。

そして、開いた首の装甲の中、ハッチの奥へ大きな体を滑り込ませる――

――暗闇に目の前に映る分厚い機械の棺桶。

立ったままの操縦。身体がすっぽりとはまるような感覚でコックピットに身体が収納される。

目元に自動でヘッドマウントディスプレイが取り付けられ、僅かに伸ばした手足が周囲の機械にすっぽりとはまる。

それは機体追隨の為の操作デバイス、狭い空間の中に手足が壁に

収められる。

そして頂垂れるままに、狼男はディスプレイの向こうに映る、ムスツとした獣人の少女を見下ろし笑みを浮かべる。

ガシャリ……

身体をよじるままに、黒き巨人、オルフェト・オルタカスタムを立ち上がらせる。

『——エトナは休んでおけ。俺が代わりに入る』

「ず、ずるい！」

『女は生きた方がいい』

「な、なんですかそれえ！？」

『俺の単なるわがままだ——ミア、出るぞ』

紅い残光を引きながら踵を返すままに、音もなく地面を蹴りあげる巨軀。

ヒュオオオッ

突風を引きずりながら、高速で飛び出す黒い巨軀はまるで風の如く銀髪の後立を靡かせ再びメグロの廃墟へと姿を現した。

飛び出すままに振り返れば、そこには広がる浅いクレーター状の更地。

その中には崩れたビル of 瓦礫を盾にして撃ち続ける味方オルフェトの姿、その奥で後ずさる敵機エルザの姿が見える。

前線は少しずつ上がっている。

その向こう、スポットライトに照らされ巨大な施設が見えた。

丸いドーム状の建物、周りには低い塀があり、その周りには巨大なパイプがまるでイカの足ののように八方に伸びていた。

日本連邦政府所有の特殊電力送電施設。

ユウ達が壊すべき建物が、浅いクレーターフィールドの遥か向こうに見える——

(……ガングレド、頼むぞ)

戦い続ける仲間を横目に、風を切り翻す長い銀髪。

ドスンッ……ドスンッ

ビルの屋上に飛び上がるままに、ゆつくりと沈む廃ビル。

閃光を背に飛び上がる黒い巨人は、いくつものビルの屋上を伝い、宵闇の中を潜るように前かがみに駆けていく。

夜風を切りながら紅い目を暗闇に光らせ、弧を描いてビルから飛び降りる――

『ミア、このあたりか』

ズウウウンッ

土煙を上げ、地面に降り立つ黒きオルフェト。

長い後ろ髪を靡かせながら、しなる膝を動かし立ち上がると、狼男は首を動かし周囲を見渡した。

『ここだよ、ランデブーポイントもここに設定したよ』

『ありがとう』

地響きが収まり、静まり返る夜の街。

廃虚の街を流れていく風。

土煙が晴れ、周囲のビルの窓から顔を覗かせた異人の骸がモニターに映る。

グシャリ……

地面に転がる無数の死体を踏みしめ、ゆつくりとユウのオルフェトはビルの壁に腕を這わせ路地を歩く。

だが敵の姿は見えなかった。

崩れかけたビルが斜めに折り重なりながら、眼前の視界を遮るのみ。

カラン……

傾いたビルの窓から剥がれたガラス片が装甲を撫でる。

地面を押し込む巨人の足音が静かにビルの間を反響し、冷たい風が黒い装甲を撫であげていく。

グルルルウ……

緊張に喉を鳴らす――

『……そこか』

――ヒクリと尖る耳。

遠くから聞こえる、キヤタピラが地面を擦る音。

鼻筋を掠めるは、金属の擦れる独特の匂い。

来る――

『隊長、今つき――』

『――アリシア、ユン下がれ！ミナト行くぞ！』

『了解！』

『出力調整――パルスバスターツ』

後方のビルから飛び込んでくる中距離装備のオルフェトを背に、
紅き瞳のオルフェトは地面に大きく足を踏み込んだ。

ザクリツ

脚部の装甲が展開し、四本のステークが微振動を上げてアスファ
ルトに突き刺さる。

『――始動』

足元から噴き上がる土煙。

ソレと共に、地面が大きく崩れ落ち、紅き瞳のオルフェトは地崩
れに吸い込まれるように土煙の中へと潜った。

ソレと共に後ろからついてきていたアサルトライフル装備のオル
フェトが土煙の中へと飛び込み、遅れて極長のバレルを備えた対装
甲ライフルを担ぎ二機のオルフェトが続いていく。

そこは更に深い暗闇。

入り組んだ道はまるで蛇の如く、縦横無尽にメグロの地下を走り、
立体状に入り組んだ暗闇は正に迷路だった

東京地下メトロエリア。

地下一キロに及ぶまでに広がった地下鉄道のうねりの表層へ紅き
瞳のオルフェトは降り立つ。

――暗闇に迸る激しい閃光。

刹那、天井から降り注ぐ土煙を貫き、いくつも弾丸が小さな雨を
となって、地下鉄道を走った。

クワツと見開く紅い瞳。

身じろぎひとつで弾丸をよけるままに、四機のオルフェトは背後

から飛んでくる硝煙の匂いに身体を屈める。

そして、細長く入り組む鉄道の向こう、暗闇の中で銃撃を行うエルザを捉える。

数は五機。

圧倒できる――

『突っ込む――ユン、アリシア。頼むぞ』

『了解、エンゲージ』

――左腕から迫り出す鋭いブレード。

弾丸に目を細めながら、紅き瞳のオルフェトは脚部の補助スラストーに火を灯し、ゆつくりと身体を屈める。

飛び出さんと、黒い装甲を震わせる――

『ミナト、俺のケツを持て、行くぞッ』

『張りきって行きましょうか隊長！』

――闇に走る紅い残光。

装甲の隙間から噴き上がる光の粒子。

屈む姿はまるで狩りをする夜の獣の如く――紅き瞳のオルフェトは光を放ちながら地面を蹴り飛び出した。

何百メートルとある距離は一秒の壁を越え、縮まる。

後ずさる暇すらなく、五機のエルザの目の前に、紅き瞳の巨人が、大きくブレードで虚空を薙ぎ払う姿が見える。

二機の機体の表面に一文字に斬った痕が浮かび、火花が宵闇に断続的に光を放つ。

『遅い……！』

後ずさる三機を追いかけ、紅い瞳のオルフェトの背中から飛んで来る弾丸。

片膝を折り、銃座を立てて放つ二発の徹甲弾は頭部を丸ごと粉々にして、衝撃に二機のエルザを吹き飛ばした。

暗闇の中バウンドする二機のパワードスーツ。

闇に尾を引く紅い瞳。

その二機の胸部に喰らいつくように、飛び出した紅き瞳のオルフ

エトは、突き出した内蔵ブレードを突き出した。
ガガガッ

全重量を乗せ、火花を上げ装甲を抉る鋭い刃。
ビクンと僅かに喰らった躯体が痙攣すると共に、音無く内蔵ブレードを引き抜けば、黒と赤の混じった飛沫が中から噴き上がる。
黒ずんだ装甲が僅かに闇に光り、紅き瞳は血飛沫を浴び倒れたもう一体を捉える。

スウと双眸を細め、巨軀を傾ける――

――風を切る鋭い剣閃。

振り難いだ刃は僅かに真空を生み、無音の衝撃波が周囲の景色を歪め、頭部の無いエルザに一本の筋が浮かぶ。

それは闇にくつきりと浮かぶ斬痕。

死線に沿うように胸部が縦に分かれていき、火花を散らし二つに分かれた断面が露わになる。

背を向け立つ紅い瞳の巨人の背後で、大きく爆発を起こす――
『残り……』

爆発を背に、立ちあがる巨軀。

爆風に銀色の後ろ髪を靡かせながら、紅い瞳のオルフェトはスウと闇に眼を細め身体を屈める。

ダラリ左腕を垂らすままに火花を立て地面を擦るブレード。。

最後の一機が後ずさるままに、ライフル弾を飛ばそうと携行小銃をにじり寄るオルフェトに掲げる。

――ドドドッ

闇に迸る断続的な閃光。

胸元を抉る三つの大きな弾痕。

巨大な空薬莢が足元に落ち、三点バーストに掲げたライフルの銃口から白煙が噴き上がる。

ゆつくりと小銃を構えたまま倒れるエルザを横目に、ミナトのオルフェトは肩にアサルトライフルを担ぐ。

そして、アイサイトの向こうに、身体を屈める黒き獣の鋭い眼光

を見下ろす――

『――良い腕だ』

『一匹残してくださいよ……』

『遅いお前が悪い』

『ひどい隊長。これが俺らのトップとか……』

『いやか？』

スウと細める紅い双眸。

左腕に内蔵ブレードが装甲に収納され、屈めていた身体がゆつくりと起き上がり、紅い瞳のオルフェトは三機の友軍機を見つめる。

全機の生存を確認する――

『うんにや。最高ですよ』

『ありがとう。……ミア、奴らのルートはどこからだ？』
シューウウウ……

装甲の隙間、或いは関節から零れる光の粒子。

長い銀髪の後立を翻し、紅い瞳の残光を引き、オルフェトは入り組んだ周囲を見渡し、線路を踏みしめる。

『――ん。解析完了。そっちエルートから来ているよ。地図をこつちで出すから』

『いや。こつちから送電施設には入らん。ゴールドチームがやってくれるだろうし、こつちは挟撃が入らないように見張る。』

他に挟撃の入りそうなところは？』

『――いくつかありそうだけど、今のところどこも反応はないね』
『ポイントを提示してくれ。マンツーマンでオルフェトを向かわせる』

『本気でメグロを落とすの？』

『不利な戦いは今に始まったことじゃない』

地下鉄エリアから撤退を始める三機のオルフェト。

地面を蹴りあげ、紅い瞳のオルフェトは地面を蹴りあげ、地上から入ってきた天井の穴へと戻ろうとする。

長い後ろ立てを引き、その場を去ろうとする――

——フワリ……

銀色の後ろ髪が、舞い上がり、肩装甲を撫でる。

『！』

反射的に迫り出す左腕内蔵ブレード。

立ち止まった紅い瞳のオルフェトはそのまま後ろを振り返るままに、グツと身体を屈め暗闇に向き合った。

『隊長？』

『風が来た……』

『どうい——』

『地下鉄に乗ったことぐらい、お前にもあるだろうユニ』

そして入り組んだ線路の向こう、蛇の如く大地の食い破る迷路の奥を覗く。

生温かい風に目を細める——

『来るぞ！』

——暗闇を再び破る激しい閃光。

ヒュオツ

風を切り、巨大な槍のような弾丸が、アリシアのオルフェトの腕部を持っていた対装甲ライフルごと根こそぎ持っていった。

『キャアアツ！』

吹き飛び地面にバウンドして転がるアリシアのオルフェト。

ユニのオルフェトは後ずさるままに、闇の向こうから攻撃してくる敵の気配に後ずさりつつ、狙撃銃を構えた。

だが矢次に降り注ぐ弾丸の中、照準はブレ、弾丸はあらぬ方向へと飛んでいく。

それでも、立ち上がるアリシア機をミナト機と共に庇いつつ、銃口を迷路の暗闇に向けトリガーを引き絞る。

『た、隊長……！』

『アリシア、どうだ！』

『くう……腕……痛い、かも……』

『引くぞ！ステルスエフェクト起動する！』

——噴き上がる光の粒。

右腕の内蔵機関砲を放ちながら、紅き瞳にオルフェトの黒い装甲が一斉に花びらを開くように開いた。

そして開いた装甲の隙間から光の粒が噴き上がり、闇をうつすらと照らすままに四機の機影を光の中に溶かしていく。

そして光の膜は膨れ上がるままに、四機の姿を完全に消し去り、やがて収縮する。

スウと小さくなり、やがて粒子が消えてなくなる頃には、オルフェトの姿は闇の中に沈んで消えた。

それでも止まない、闇を照らすマズルフラッシュ。

銃撃は止まず、暗闇の中、四機のオルフェトがいた場所へと十機のエルザは弾幕を浴びせかける。

敵を殺す様に確実に、銃撃を浴びせかけていく——

『……ユウ……てめえ……』

暗闇の中、呻くような声が闇に響いた。

『殺してやる……絶対にだ』

それは怨みに満ちた『人』の声だった。

四話目

「大丈夫か、アリシア……」

線路の奥へと退避しながら、紅き瞳のオルフェトから降り、銀色の狼は片腕のなくなった友軍機へと歩み寄った。

周囲の二機も同じく線路の隅に座り込み、壁にもたれかかったアリシアのオルフェトへと歩み寄る。

そしてヨロヨロと首元から這い出す人影を捉え、銀の狼男は地面を蹴り飛び上がる。

「隊長……すいません」

「よかった……」

—— ホツと零れるため息。

そこには肩装甲に寄りかかるままに、あり得ない方向に曲がった右腕を垂らす獣人の少女がいた。

だがそれ以外に身体的外傷は胸元の折れたアバラ骨ぐらいでユウは満足げにうなずく。

「生きているだけでいい…… ユン、ミナト、大丈夫だッ」

「よかったぁ…… アリシア、ボケツとすんなよ頼むから！」

片腕の無いオルフェトの足元、黒い狼男のユンから飛び出す涙の罵倒に、アリシアはうつすらと笑みを零した。

と、スツと折れた腕に這う太い指。

痛みに体毛の滲んだ顔をしかめながら、目線を上げれば、そこには険しい表情を浮かべる銀の狼男の姿。

突き出た口腔を僅かに開き息を吸い、紅い瞳を細めて指を折れた部分に這わせる。

目を閉じて、囁く——

「エトリア——アストライア……」

——手の平から噴き上がる光の粒。

刹那、囁く銀の狼男の手の平の中に円形の模様が浮かんでは空中に刻まれ、光の粒が零れた。

光の粒は、円形の模様から少女の腕を癒す様に纏っていく。

そして光の膜に腕全体が包まれるままに、ポカンと惚ける少女の腕の形が真っ直ぐになっていく。

ゆっくりと紅い瞳を開ける——

「……少しは楽になったか？」

「は、はい……今は」

「仲間には内緒だ——юн、ミナト、アリシアを前線まで送れ」
手を閉じるままに、消えていく円形の模様。

ソレと共に光の粒もその姿を消し、ユウは肩装甲の上に立ち上がるままに、線路の向こうへと振り向いた。

フワリ……

噴きこんでくる生温かい風。

——ガシャン……ガシャン……。

ヒクリと耳を尖らせながら、遠くから聞こえてくる重たい足音。
にじり寄る敵意に逆立つ首の体毛。

徐々にだが、敵の気配が近づいてくるのが突き出た鼻をつき、鼻筋に皺を浮かべながらユウは険しく目を細めた。

「……敵が来る。時間がない」

「隊長は？」

「増援を連れて前線には戻れん。ここで食い止める」

「はあ!？」

惚けた声を上げるミナト、ユンは同じくぽかんと耳を垂らし口を開いたまま絶句していて、ユウは小さく肩をすぼめた。

「まったく——ならお前達が食い止めるか？」

「いや……でも……」

言い淀む二人。

蹲る彼女の身体を両腕に抱え上げると、黒い装甲を蹴りあげ銀の狼は二人の下へと降り立つ。

そして、二人にぐったりとなる獣人の少女を渡すと、銀の尻尾を翻し獣は再び片腕のないオルフェトへと向かう。

スツと手の平を黒い装甲に添え、ゆつくりと目を閉じる――

「……エトアス――ファナトオルカ……」

「隊長？」

「……。俺一人でもどうにかなる、お前達は帰ったらゴールドチームの支援に回れ」

そう言いながら、ゆつくりと半壊したオルフェトから手を離すと、ユウは惚ける二人にそう告げた。

――それは舞い散る蛍のよう。

音もなく弾ける粒子の花びら。

刹那、装甲の隙間から無数の光が舞い上がっては、周囲の暗闇を照らし、ゆつくりと銀の狼に降り注いだ。

グツと掲げて広げる手の平。

吸い込まれるように光の粒が、銀の狼の手の平へと集まっていく。それはまるで渦を描くように――

「マジでやる気だこの人……」

「無茶はお前らより下を行っているつもりだ。早く行け」

「……」

「ああ。俺のオルフェトを使え。お前達のオルフェトじゃ、アリシアの搬送はできんだろっし」

「――しかも生身で戦うと言う……ガングレドさん失禁しますよ」

「友達が待っているからな……」

「はぁ？」

「――なんでもない……」

小さくため息をつくままにユウは手の平を下ろす。

――噴き上がる光の粒。

そこには小石程の大きさの白い結晶が獣の手の中に漂い浮かんで

いて、狼は静かに手の平を閉じ、胸ポケットに収めた。

そして踵を返すままに、惚けるユンとミナトを促し、アリシアを紅い瞳のオルフェトを搬送させる。

「ほら行け。ここは俺が食い止める」

「——十分経って帰って来なかったら……援軍にきますから」

「心配性だな……」

「アンタのせいでしょうがッ！」

怒号が古い地下鉄に迸り、ミナトはムツと顔を引きつらせながらアリシアをユウのオルフェトへと乗せた。

そしてユンとミナトもオルフェトに乗ると、やがて三機の巨人が銀色の狼を見下ろす。

少し心配そうに立つ三機の友軍を見上げ、銀の狼はペタンと耳を垂らし困った笑みを滲ませた。

「大丈夫、早めに帰るさ。銃も弾薬込みで結構持つてる」

「——帰ったらガングレド副長にチクリますから」

「後で怒られるさ。……行ってくれ」

「あんたは俺達の希望なんだ。……死ぬなよ隊長っ」

「ここから百メートル行ったら地上に上がれ。敵はすべて本隊が対応しているが一応索敵は怠るなよ」

『了解、御武運を』

迫り出す脚部のキヤタピラ。

土煙を上げ、騒音と共に二機のオルフェトはアリシアのオルフェトを肩に担ぎながら線路を走りだした。

噴きこんでくる風とは反対方向に、闇の奥へと沈んでいく——

——別に、一緒に戦ってもよかった。

ペタンと零れる尖った耳。

スウと闇の中、紅い瞳を細め困った笑みを滲ませるままに、銀の狼男は腰に手を当て踵を返した。

そして暗闇の中、僅かに俯きながら地面を蹴り歩き出す。

巨大な迷路の中、反響する自分の足音を聞きながら、静かに息を

吐き出し花をヒクつかせる。

獣の顔を強張らせ、闇の中にゆっくりと目を閉じる。

——ただ、これは俺の我がままだ。……最初から最後まで、全部。

ザワリ……

風の向こうに感じる敵意に逆立つ体毛。

鼻筋に自然と皺がより、牙を覗かせ獣人は体を僅かに奮わせ、腰から二丁の拳銃を引き抜いた。

大口径の自動式拳銃。

五発カートリッジの大型弾を装填し、獅子鼻のマズルブレーキを覗かせる巨大なバレルを持つ大型拳銃だった。

グツと握りしめれば、手に吸いつく感触。

それだけで安心感が胸を走り、狼はうつすらと口元に笑みを浮かべながら、獣顔を上げる。

暗闇の奥、入り組んだ蛇の如き道を伝い、やってくる十機の気配に尖った耳を震わせる。

向けられる激しい敵意に、脚を止めて二丁の銃口を向ける。

鋭く、ナイフのように鋭く目を細め、狼は闇に紅く残光を引く——

「……一週間ぶり、だな」

『……生きてたか……化け物が』

立ち尽くす銀色の獣人を前に、従軍を止める十機のエルザ。

ソレと共に十の銃口が狼男を捉え、その内の一体、白い装甲のパワードスーツがゆっくりと彼の下に歩み寄った。

吐き気がするほどにドロドロとした敵意。

剥きだす憎悪。

七年前から何も変わらず——

狼はニイと目を細め困ったような笑みを滲ませては、二丁の拳銃を構えたまま目の前の巨大な白い巨人に肩をすくめた。

そして、口を僅かに開いて、闇に囁く——

「……よお、タクト」

『ユウ……ユウ・アトラ……！』

「やろうか……」

『殺してやる……！』

——それ以上の会話はなく、ただ獣は紅い瞳を細める。

ガシャリッ

殺意と怨恨を露わに、白いエルザは持っていた巨大な突撃小銃を両腕にサッと構えてトリガーを引き絞る。

ソレと同時に銀の狼は、拳銃のトリガーを絞り、マズルフラッシュが闇を裂く。

ドオオオオオッ

光に遅れて、激しい銃撃音が闇の中に響き渡った。

五話目（前書き）

英数字か漢数字に統一しろって？イヤ（＊、ω、＊）うん、これ投稿して七日後削除してから直す事にする

五話目

2056年、二月十三日、午後六時七分。

僕は彼女と彼女の兄との三人で家路についていた。

名前は、綾川美沙。

僕の一歳下で高校一年生で、僕の好きな人だった。色白で綺麗な黒髪は肩まであって、スラッとしていて出も少し背は低くて僕を見上げるくらいで。

笑顔がとても綺麗な、僕の大好きな人だった。

明るい性格で皆に好かれていて、所属するテニス部でも優秀で顧問の先生が彼女を褒めていたのを覚えている。

非の打ちどころの無い、本当に素敵な人だった。
ずっと一緒にいたかった。

「どうしたの？夕君？」

「また何か考え事をしてたんだろ。ぼおっとしてるからな夕は」

「——拓斗は考えなしなんだよ、僕は色々考えてるの」

彼女の隣に立っているのは、彼女の兄の、綾川拓斗。

僕の数少ない友達で、多分、僕の恋敵になるだろう人だった。

スポーツも万能で、少し勉強はできないけど、それでも頭は回
し、彼女と同じくらい明るく、皆に好かれていた。

二人とも、僕にとってあこがれの人だった。

特に拓斗は、僕にとってある種嫉妬を覚えさせるくらいに、優秀
だった。

「ぬかしおる」

「……にひひっ、勉強だって僕の方が上だしね」

「——お前、俺が本気出したらちびるで」

「僕、スポーツなら君の本気見たことあるけど、勉強で本気を見たことないんだけど」

「あるぜ？」

「夏休みの宿題は僕が半分手伝ったよ？」

「——あるよ、多分」

「ネタ潰し成功」

「くああああ。むかつくつ、お前ホントムカツクわっ」

「にひひっ」

地団駄を踏みながら歩く拓斗に、僕は肩を震わせて少し小気味よく笑う。

多分、彼はそれほど悔しくないのだろう。彼も自分が頭がいいのはなんとなくわかってるだろうから。

だけどそんな素振りをしてくれるだけで、僕の自尊心は満たされた。

その事も、彼はわかってるだろう。

悔しいような、嬉しいような——僕は複雑な笑みを浮かべ、隣で歩く彼女を見下ろした。

クスクスと彼女は端正な顔を綻ばせ、嬉しそうに笑っていた。

「ふふふっ……お兄ちゃんも夕君も楽しそう。私も混ぜてよっ」

それだけで、胸が破裂しそうな程高鳴って。

声が出なくて——

「ふうんだっ。勉強なんぞできなくてもな、スポーツで俺は宇宙に出るんだよっ。宇宙バスケに出るんだよっ」

「お兄ちゃんそればかり。勉強もできないと、外国の人と喋れないよ？」

「美沙もそんな事言う、お兄ちゃん悲しい……」

「だったら夕君みたいに勉強する？」

「——肉体言語があるっ。外人なんざイエスとノーが使えれば後は体でぶつかればええ事よっ」

「だから毎日傷だらけなんだ……」

「あ、ち、違うの——ああ、そんな目で見ないでお兄ちゃん気持ちよくなるううう」

「……夕君いこっ」

そう言つて悶える拓斗を横目に、彼女はギュツと僕の腕に腕をかためて、惚ける僕を引つ張る。

彼女の体温が伝わり、少し荒い息遣いが聞こえる。

少しムスツとしていて、それでいて少し微笑んでいるような小さな唇が見える。

惚ける僕を横目に見上げ、少し照れくさそうに笑う彼女がいる。

その笑顔がとても可愛くて、僕は顔を耳まで真っ赤にする——

「……」

「……ねえ夕君」

小声で華奢な身体を寄せながら、彼女は肩にコツリと頬を擦りつける。

それだけで、僕はどうしようもなく戸惑い、口がまともに動けなくなり、手足がびりびりと痺れる。

どうしようもなく、彼女の事で一杯になる。

息が上がり、寒いのに体の芯から真っ赤になっていく——

「み、美沙ちゃん……」

「えへへへっ……恋人同士みたいだね」

「——」

正直ここから先は、あまり自分が何を言ったのか、彼女が何を言っていたのか思い出せなかった。

ただ、彼女が微笑んでいたのを覚えていた。

それだけが、胸の奥深くまで刻まれていた。

とても綺麗な笑顔だった。

「ねえ……夕君。明日、誰かからチョコもらつ事とかある？」

「え……えと、お母さんから貰うとか……犬のチョコに上げるんだけど僕は……えと」

「ふふっ。男の子なの？」

「う、うん毎年お父さんがあげる振りしろって……うん……」

「——私から貰っても嬉しい？」

「も、もちろん……うんっ、嬉しい……嬉しいよっ」

「——ぎ、義理だからね」

「う、うんっ……」

「お兄ちゃんと一緒だし——勘違いしちゃだよっ」

「う、うん……でも、嬉しい」

「——明日、ちゃんと作るからねっ」

嬉しそくに、彼女は微笑んだ。

夕闇の中、少し頬を染め、黄昏時の空の下、僕の腕に華奢な身体を寄せながら彼女は、僕にそう告げた。

僕はというと、全身真っ赤にして、頭から湯気が出そうなくらい息を上げていた。

正直なところ言つと、血管が切れて死にそうなくらい、心臓がバクバクいつていた。

そんな音を彼女に聞かれたくなくて、僕は胸元を僅かに抑えた。それでも、心臓の音は止まらなかった。

「こらあああ！そんな異性交遊お兄ちゃんは認めんぞおおお！」

飛び込んできて、僕らの愛大入ってくるのは拓斗。
ムスツとこちらを睨む彼の横顔の向こう、突然の兄の行動に惚ける彼女の顔が見えた。

そして、僕の方を見た。

優しく微笑んでいた。

ホッとするような少し寂しいような——僕は再び三人で夕闇の街を見下ろし、坂道を上がっていく。

いつも一緒に、長い坂道。

隣同士の家を目指し、共に歩いていく。

そして明日も、同じように、登校時間、三人で隣同士の家を出て、この坂道を降りて同じ高校へと行くだろう。

ずっと一緒に——

「おい、何話してたんだ夕？」

「—— な、なんでも……」

「…… 美沙あああ、お兄ちゃんに黙って夕と付き合う気かあ!？」

「バカ兄貴ッ!」

鉄拳が右頬にめり込み、拓斗が吹き飛ぶ。

変わらぬ日常の風景。

ずっと続けばいいと思った。

—— だけど、それも程なく終わるだろう。

拓斗はスポーツ推薦で他の大学へと行くだろうし、美沙ちゃんは頑張っている大学に入ることだろう。

僕はというと、親の頼みもあり、高校を出たら働くつもりだ。

今年は高校二年の二月。

もう進路を決めないといけない。

別々の道を歩いていけないといけない。

だから、伝えたかった——

「…… 美沙ちゃん」

「何夕君っ？」

彼女は僕の呼び掛けに微笑んでくれた。

それだけよかった。

—— 明日、彼女に告白しよう。

ちゃんとしたチョコを作って—— 本当は女の子が男の子に上げる日なんだけど—— 彼女に渡そう。

振られた方がいい、このまま何もないまま終わらせたくない。

決別するために、或いは次につなげるために

僕、夕・アトラは明日告白する事に決めた。

明日、二月十四日。バレンタインデー。

あの日に、俺は彼女に愛を告げることを決めた。

人類の割が死滅した、あの地獄の日に、俺は彼女と共に生きようと決めた。

五話目（後書き）

一人称と三人称のコラボオオオオ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4601ba/>

黄昏のオオカミ—The Twilight of Xenoatla—

2012年1月12日20時09分発行